■　彫刻の森

国立岩手山青少年交流の家

開所 20 周年作品①　**長内　努　氏 作 「雲のヴィナス」**

古代ギリシャの造形に憧れを持ちながら制作した作品です。頭上に乗せている雲がフィールドの中で非常に面白い空間を構成し、物語性を兼ね備えたものとなっています。作品のタイトルが示すように、「雲のヴィナス」は雲や自然の要素を取り入れて、抽象的で幻想的な表現をしています。

開所 20 周年作品②　**長内　努　氏 作 「イオニック　ヴィナス」**

石や木などの自然素材で彫刻を制作している長内は、この作品では、頭部の表現を省くことで具体的な個人や人物像に限定されることなく、より普遍的なテーマや感情を伝えています。抽象的なアプローチにより、観客は自分なりの解釈や感じ方を持つことができ、作品との対話が深まることでしょう。

開所 20 周年作品③　**高橋　典雄　氏 作 「大地が動きだす時」**

円形の構成を通じて大地や太陽などの自然の要素を表現し、自然の偉大さと調和を強調した自然讃歌の要素が感じられる作品です。

開所 20 周年作品④　**宮永　多香子　氏 作 「Touch of Sound・芽吹き」**

この作品は、音楽的要素を取り入れ構成された作品です。感情や体験に深い影響を与える力を持っており、目にはみえない音という要素を組み込むことで、より豊かな表現となります。そして、春の季節に新しい命や成長が促されるように、新たな感情やエネルギーが芽生える様を表しています。

開所 20 周年作品⑤　**藁谷　収　氏 作 「太陽の風景」**

自然の美しさや豊かさを表現すると同時に、人間の活動によって変化していく自然の姿を描写しています。自然と人間の関係性を問いかけることもできます。このような風景作品は、自然や環境に関心を持つ人々や、自然の美しさや豊かさを感じようとする人たちにとって、抽象的な形ゆえ新たな感覚として、メッセージを投げかけてくれます。

開所 20 周年作品⑥　**佐々木　悦也　氏 作 「ノジュールと化石Ⅱ～太古の舟」**

古代の舟のイメージを表現し、リズム的な形状や繰り返しパターンを使用することで、視覚的な統一感や調和が生まれ、太古の舟の力強さや独特のデザインが強調された作品です。

開所 20 周年作品⑦　**松川　善光　氏 作 「永久機関Ⅶ」**

連続するエネルギーをエンジンのようなフォルムで自然の中に設置し、観る人にダイナミックな造形を提示しています。石とワイヤーを使用して、動きや変化の感覚を与えることで、アートと自然の融合を強調し、エンジンのようなフォルムは、技術と自然、人工と有機的な要素の間の関係性を探る試みとして解釈できるでしょう。

開所 50 周年記念行事作品⑧　**大成　浩　氏 作 「耀風 no.13」**

大成の作品は、自然や人間の存在と関係性を表現し、抽象的な形状や素材感を活かした作品が多く見られます。彼の作品は、その重厚感や力強さから、多くの人々に強い印象を与えると同時に、自然や人間との関係性について考えるきっかけを与えるものとなっています。

開所 50 周年記念行事作品⑨　**渡辺　隆根　氏 作 「Trembling Stone」**

自然の中に、キュービックな形を彫り込んでリズミカルな変化を表現したこの作品は、風景彫刻や環境アートの一部として見られることがあります。彫刻家やアーティストが自然素材を使って創り出す作品は、環境や光の変化で、独特の美しさや意味を持ち、その時々によって表情を変えます。

開所 50 周年記念行事作品⑩　**菊地　伸治　氏 作 「失われた記憶」**

球体やピラミッドなどの単純な形を使用して、自然の美しさや宇宙の調和を表現しました。彼の作品は、石や金属などの素材を使用して、抽象的で力強い美を追求しています。そして、空間との相互作用や光の反射など、時間や天候によっても様々な印象を与えます。

開所 50 周年記念行事作品⑪　**大木　達美　氏 作 「時の化石」**

《僕の作品には全て「化石」という題名がついてます。何故つけるかというと、ずっとずっと未来に例えば自動車とかミサイルとかが諸々の今の時代のものが出てきた時、僕の彫刻も化石となって出るかもしれない。その時２０世紀はこうだったんだよ、とメッセージを送りたいのです。そして現在の良い部分を伝えたい。そのために僕はこの時代のアンテナとなって、２０世紀の良い部分を全部吸い上げたいと、思っているのです。》

開所 50 周年記念行事作品⑫　**藁谷　収　氏 作 「echoes」**

森の深いところで響きを感じ、その様子を表現している作品です。半円形という単純な形を基本としながら様々な情報を組み込もうとしています。自然と人間の営みが森の中で共鳴するというコンセプトは、自然の美しさや人工的なものとのバランスの面で、作家の観察力が表現されています。

開所 50 周年記念行事作品⑬　**ジェームス ・ハリス　氏 作 「新芽は古い根っこと共に」**

イタリア人彫刻家によって東日本大震災の被害を目の当たりにして制作された彫刻作品です。この作品は、震災の被害を受けた地域や人々の復興と再生を願いながら制作されたものと考えられます。新しい芽が古い根っこと共に成長するように、被災地が過去の経験や歴史、文化を背負いながらも、未来へ向かって成長し再生していく姿を象徴しています。

開所 50 周年記念行事作品⑭　**マテオ・デヴォーティ氏　作 「ミスターホワイト（自己省察）」**

自己省察を意図したこの作品は、イタリア人彫刻家によって、実際に訪れた東日本大震災の被災地の現実を目の当たりにし、その時の衝撃や悲しみ、次は希望へ、と様々な感情を彫刻に組み入れて表現したものと考えられます。目撃した光景や出会った人々の姿から、自身の内にある感情を省察し、彫刻家の内なる想いを呼び起こし、創作の源となったのかもしれません。